

修正主義について

……フランスのブルジョアジーは、プロレタリアの運動を鎮圧するためには、一瞬もためらわずに、全国民の敵、すなわち自分の祖国を破滅させた外国の軍隊と取引した。議会制度とブルジョア民主主義との不可避的な内的弁証法——すなわち争論の解決が以前よりもいっそうするどく大衆（へ——青山加筆）の暴力によっておこなわれるようになるという——を理解しないものは、労働者大衆にこうした「争論」へ勝利的に参加する準備をほんとうにさせる、原則的に一貫した宣伝・煽動を、この議会制度を基盤としておこなうことは、けっしてできないであろう。西欧における社会改良主義的自由主義との、またロシア革命における自由主義的改良主義（カデット）との同盟、協定、ブロックの経験は、つぎのことを明確にしめた。すなわち、こうした協定は、大衆の意識をにぶらせるだけであり、戦闘的な分子をもっとも闘争力のない、もっともぐらついた、裏切的な分子にむすびつけることによって、大衆の闘争の真の意義をつよめずによわめるということ、がそれである。フランスのミルラン主義——修正主義の政治的戦術を広範な規模で、真に全国的な規模で適用した最大の経験——は、全世界のプロレタリアートがけっしてわすれさることのないような、修正主義の実践的評価を提供した。

社会主義運動の究極目標にたいする修正主義の態度は、修正主義の経済的および政治的傾向の当然の補足物であった。「終局目標は無であり、運動がすべてである」——このベルンシュタインの標語は、多くの長たらしい議論よりもずっとよく修正主義の本質をあらわしている。そのばあいばあいで自分の行動を決定し、日々の諸事件に、些細な政治の風むきに順応し、プロレタリアートの根本的利益と、全資本主義体制、全資本主義的進化の基本的特徴とをわすれ、目前の現実の利益または仮想された利益のためにこの根本的利益を犠牲にすること、——これが修正主義の政策である。そして、この政策がかぎりなく多種多様の形態をとりうること、またすこしでも「新しい」問題、すこしでも思いがけない、予想外の転換がおこるたびに、——たとえその転換が発展の基本方向を、ほんのわずか、またほんの短い期間かえるにすぎないばあいでも——つねに不可避的に、修正主義のあれこれの変種が生みだされることは、以上のような修正主義の政策の本質そのものから生じる。

修正主義が不可避であるのは、現代社会におけるその階級的根源によるものである。修正主義は国際的な現象である。多少とも事情に通じた、思慮のある社会主義者ならだれであろうと、つぎのことにはいささかの疑いの余地もない。それは、ドイツの正統派とベルンシュタイン派、フランスのゲード派とジョレース派（いまではとくにブルース派）、イギリスの社会民主主義連盟と独立労働党、ベルギーのブルケールとヴァンデルヴェルデ、イタリアの全一派と改良派、ロシアのポリシェヴィキとメンシェヴィキの関係は、これらすべての国々の現状には民族的条件や歴史的要因に非常に大きな差異があるにもかかわらず、本質上どこでも同種のものである、ということである。現在の国際社会主義運動の内部の「分裂」は、いまではすでに世界のいろいろな国で、本質上ただ**一つの**線にそっておこなわれており、この点で30～40年まえの状態にくらべて巨大な前進を証明している。その当時は、単一の国際社会主義運動の内部の同種の傾向が種々の国でたたかっていたの

ではなかった。また、いまラテン系諸国に「革命的サンディカリズム」として現れてきた「左からの修正主義」も同様にマルクス主義を「訂正」しながら、それに順応している。イタリアのラブリオーラやフランスのラガルデルは、誤り解されたマルクスに反対して、ただしく解されたマルクスにひっきりなしにうったえている。

われわれはここで、この修正主義の思想的内容の検討に立ちいることはできない。それは、まだけっして日和見主義的修正主義ほどに発達してもいないし、国際化してもいないし、ただ一国においてであれ、社会主義政党と実践的な大格闘をただ一回もおこなってはいない。そこでわれわれは、上述の「右からの修正主義」だけにかぎることにする。

資本主義社会における修正主義の不可避性はどこにあるのか？ なぜそれは、民族的特殊性や資本主義の発展段階の差異よりも深刻なのか？ それは、あらゆる資本主義国には、プロレタリアートとならんで、小ブルジョアジー、小経営主の広範な層がつねに存在するからである。資本主義は小規模生産から生まれてきたし、またたえず生まれている。いくたの「中間層」が、資本主義によって不可避的にあらたにつくりだされる（工場の付属物である家内労働や、たとえば自転車工業や自動車工業のような大工業の必要に応じて全国に散在している小工場、等々）。これらの新しい小生産者は、ふたたび同じように不可避的に、プロレタリアートの隊列になげこまれる。小ブルジョア的世界観が、広範な労働者党の隊列のなかに、くりかえしくりかえし現れるのも、まったく当然である。現在これ以外ではありえず、またプロレタリア革命の激変がおこるまではつねにそうであるということも、まったく当然である。なぜなら、このような革命を遂行しうるためには、住民の大多数の「完全な」プロレタリア化が必要だと考えることは、はなはだしい誤りだからである。プロレタリア革命が、すべての論争問題を尖鋭化し、大衆の行動を決定するうえにもっとも直接の重要性をもつ諸点にすべての意見の相違を集中し、敵に決定的な打撃をくわえるために、闘争のさなかに敵味方を区別し、悪い同盟者をほうりだすことを強いるとき、労働者階級は、こんにちわれわれがしばしば思想的に経験しているにすぎないこと——すなわちマルクスの理論的訂正との論争——や、こんにち実践的には労働運動の個々の部分的な問題について現れていることにすぎないこと——たとえば修正主義者との戦術上の意見の相違とそれにもとづく分裂のような——を、かならずや比較にならないほど大規模に経験しなければならぬであろう。

十九世紀末における革命的マルクス主義と修正主義との思想的闘争は、小ブルジョアジーたちのあらゆる動揺と弱さにもかかわらず、自己の大業の完全な勝利にむかって前進しているプロレタリアートの偉大な革命的戦闘の序幕にすぎない。

第 15 卷 P20~22 『マルクス主義と修正主義』

おそくも 1908 年 4 月 3 (16) 日に執筆

ポイント

日和見主義的修正主義（右翼日和見主義）は、あらゆる資本主義国には、プロレタリアートとならんで、小ブルジョアジー、小経営主の広範な層がつねに存在し、これらの小生産者が、たえず不可避的に、プロレタリアートの隊列になげこまれ、小ブルジョア的世界観が、広範な労働者党の隊列のなかに、くりかえしくりかえし現れるからである。

彼らの政策は、そのばあいばあいで自分の行動を決定し、日々の諸事件に、些細な政治

の風むきに順応し、プロレタリアートの根本的利益と、全資本主義体制、全資本主義的進化の基本的特徴とをわすれ、目前の現実の利益または仮想された利益のためにこの根本的利益を犠牲にすることである。「終局目標は無であり、運動がすべてである」——このベルンシュタインの標語は、多くの長たらしい議論よりもずっとよく修正主義の本質をあらわしている。

こうした政策は、大衆の意識をにぶらせるだけであり、戦闘的な分子をもっとも闘争力のない、もっともぐらついた、裏切的な分子にむすびつけることによって、大衆の闘争の真の意義をつよめずによわめ、その闘争のエネルギーを消失させるだけである。革命的マルクス主義と修正主義との思想的闘争は、自己の大業の完全な勝利にむかって前進しているプロレタリアートの偉大な革命的戦闘の序幕である。